

看護教育における模擬患者研修の成果と課題

吉川 洋子・田原 和美・松本亥智江
松岡 文子*・井上 千晶・別所 史恵

概 要

S P参加型看護技術教育におけるS P研修の成果と課題を明らかにすることが目的である。2005～2008年のS P参加型看護技術教育に参加し、協力の得られた看護師経験をもつS P63名を対象に、事前にS P研修を実施し、教育に参加してもらった。実施後にアンケートを行った結果、S Pは、提供した資料、S P参加の有効性や自身の教育への貢献に対して高い評価をする一方、精神的負担感を感じている者が約60%おり、演技とフィードバックの2つのコア・スキルを難しいと感じていた。今後、これらの問題の解決のために、研修の中で、役作りのためのS P同士の意見交換、実際にロールプレイをして練習する機会をもつ、ビデオ撮影レビューなどを工夫していくことが課題であると考えられる。

キーワード：アンケート、患者シミュレーション、看護技術教育、看護師、
模擬患者研修

I. はじめに

看護学科3年次の臨地実習前に、模擬患者(Simulated Patient以下S P)に対して基礎看護技術を活用した看護援助を行うプログラムを通して、看護実践力の向上、主体的学習の動機づけ、実習への円滑な導入をねらっている。このプログラムの成果や課題をこれまで報告してきた(吉川, 2008)(別所, 2008)(松本, 2008)(吉川, 2007)(井上, 2006)。S Pが参加することによる教育効果は、ロールプレイに比べてリアリティが格段に高く、臨地に近い状態で実施することができる、患者としてのフィードバックを受けることができ、自己の課題を確認することができるなどがあげられる。

このプログラムにおいては、コミュニケーションだけでなく身体援助を行うことを考慮し、看護師経験をもつ学外者にS Pを依頼してきた。フィードバックは、医療者の目線ではなく一患者としての目線で行うよう依頼をした。

そのため模擬患者に対する研修を充実させることを課題と考えてきた。

本研究では、S Pに対する研修の内容とともに参加したS Pに対して行ったアンケート結果からS Pとしての意見や感想を整理し、2010年から必修科目としてはじまる「S P参加型看護技術演習」におけるS P研修のすすめ方について考える。

II. 研究目的

2009年度カリキュラム改正に伴い、必修科目となるS P参加型看護技術演習に向けて、2005～2008年のS P参加型看護技術教育に参加したS Pに対する調査から、S P研修の成果と課題を明らかにする。

IV. 研究方法

1. 対象

2005～2008年度のS P参加型看護技術教育に参加し、調査への協力の得られた看護師経験をもつS P63名

* 五日市記念病院

表1 SP研修概要

	2005年度	2006年度	2007年度	2008年度
参加者数(人)	18	21	19	19
患者の状況	脳梗塞、右片麻痺	右大腿骨頸部骨折、術後	直腸がん、人口肛門造設後	急性骨髄性白血病、化学療法後
患者の年齢・性別	85歳 女性	75歳 女性	53歳 女性	40歳 女性
研修内容	目的	目的	目的	目的
	スケジュール	スケジュール	スケジュール	スケジュール
	事例および実施予想技術	事例および実施予想技術	事例および実施予想技術	事例および実施予想技術
	シナリオ	シナリオ	シナリオ	シナリオ
			シナリオ漫画	シナリオ漫画
			経過表、アセスメント展開例、	経過表、アセスメント展開例、
	模擬患者について演技について	模擬患者について演技について	模擬患者について演技について	模擬患者について演技について
	フィードバックについて	フィードバックについて	フィードバックについて	フィードバックについて
				ファシリテータの役割
		学生アンケート結果・感想	学生アンケート結果・感想	学生アンケート結果・感想

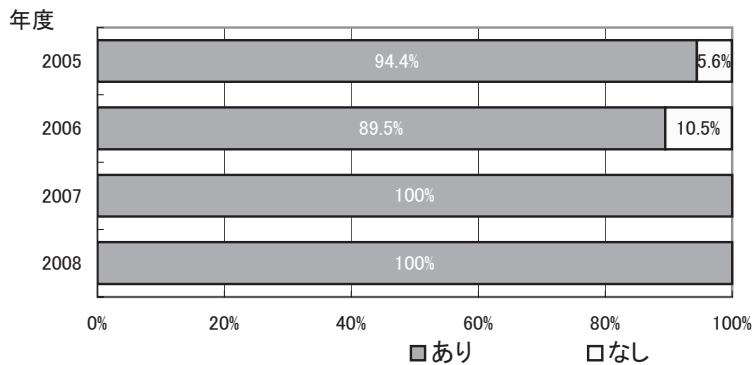


図1 不安や心配の有無

2. SP研修の概要

研修は、教育目的、スケジュール、事例および予想される看護技術、SPの役割とフィードバックの内容を約2時間で実施した。2006年からフィードバックについて、その目的や良い例、悪い例など詳細な資料を提示した。さらに、SP参加を学生がどのように受け止めているのかを前年度の学生のアンケート結果や感想から伝えた。2007年からは、それまで文字のみであったシナリオを漫画で表現したものを追加した。フィードバック内容を改訂した。また、患者の設定年齢を高齢期からSPの実年齢に近い壮年期とした。2008年から、SPとファシリテータ(教員)との役割の違いを明確にし、SPの役割をより明確にした(表1)。

3. 調査内容・方法

アンケートは、SPの実施に対する不安、準備、オリエンテーションに関連した5項目-①

シナリオの漫画(イメージ図)、②場面のロールプレイ、③フィードバックに関する資料、④フィードバックのロールプレイ、⑤学生からのSPに対する意見や感想資料-が実施に役だったのか、実施に関連して20項目-患者役の負担感、設定患者のイメージのしやすさ、演技、フィードバック、教育方法、患者の立場の実感、看護のふりかえり等で構成し、回答を「とてもそう思う」、「ややそう思う」、「あまりそう思わない」、「全くそう思わない」の4肢選択とした。

フィードバック終了後に記入し提出を依頼した。

3. 分析方法

年度毎のアンケート結果を集計し比率を出した。4年間継続して調査した20項目について年度ごとの比較を、Fischerの直接法を使用して行った。データの分析にあたってはSPSS ver.13を使用し、有意水準を5%とした。

看護教育における模擬患者研修の成果と課題

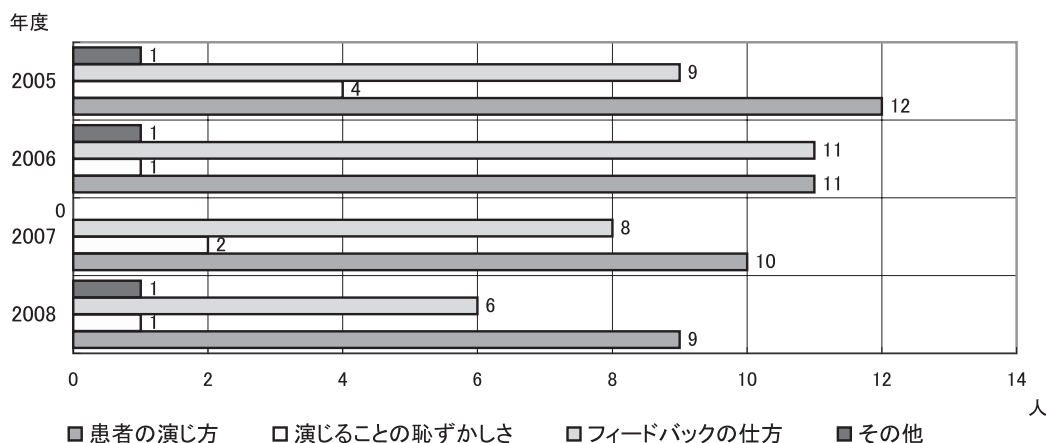


図2 実施前の不安や心配の内容 (重複回答)

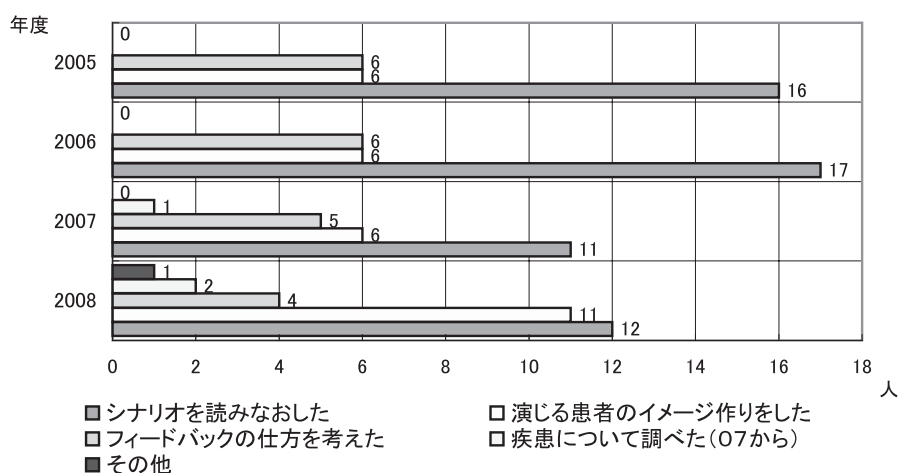


図3 準備の内容 (重複回答)

4. 倫理的配慮

調査対象者であるSPには、研究目的、研究参加の自由、プライバシーの保護、協力の有無により不利益が生じないこと、データを目的外に使用しないことを書面と口頭で説明し、アンケートの提出をもって同意が得られたと判断した。アンケートは回収箱を置いて回収し、その後はすみやかに番号化し、保管した。

V. 結 果

1. SP研修から実施まで

図1に示すように、ほぼ全員が不安や心配があったと回答し、不安や心配の内容は「患者の演じ方」42名、「フィードバックの仕方」34名、「演じることの恥ずかしさ」8名であった。図3に示すように研修後にほぼ全員がSPの準備を行っていた。準備した内容は、「シナリオを

読み直した」が最も多く56名、次いで「演じる患者のイメージ作りをした」29名、「フィードバックの仕方考えた」21名であった。

研修時に提供した「シナリオの漫画(イメージ図)は演じるのに役だった」と回答した者は「とてもそう思う」、「ややそう思う」を合わせると100%が役だったと回答した。「場面のロールプレイが役だった」(96%)や「フィードバックのロールプレイが役だった」(91%)と回答した者も90%超え、「フィードバックに関する資料も役だった」98%、「学生からの模擬患者に対する意見等が参考になった」も85%を占めた。

2. SP実施後の評価

4年間継続して調査した20項目についての結果を年度毎に示した(表2)。年度による比較を行なった結果、有意差があったものは「演じ

表2 SP実施後の評価（年度毎）

項目	2005年度 n=18			2006年度 n=19			2007年度 n=13			2008年度 n=13			有意差	
	とても そう思う	やや 思う	あまり 思わない	とても そう思う	やや 思う	あまり 思わない	とても そう思う	やや 思う	あまり 思わない	とても そう思う	やや 思う	あまり 思わない		p値
1 患者役は精神的に負担であった	11.1%	44.4%	33.3%	11.1%	42.1%	46.3%	10.5%	0.0%	76.9%	15.4%	7.7%	7.7%	30.8%	0.0%
2 患者役は身体的に負担であった	0.0%	11.1%	55.6%	33.3%	0.0%	5.3%	63.2%	31.6%	0.0%	30.8%	30.8%	38.5%	53.8%	15.4%
3 設定患者はイメージしやすかった	16.7%	66.7%	16.7%	0.0%	42.1%	47.4%	10.5%	0.0%	38.5%	46.2%	7.7%	0.0%	15.4%	0.0%
4 イメージどおりの患者を演じることができた	11.1%	11.1%	66.7%	11.1%	0.0%	26.3%	68.4%	5.3%	0.0%	46.2%	53.8%	0.0%	46.2%	0.0%
5 演じることに恥ずかしかった	5.6%	66.7%	22.2%	5.6%	0.0%	21.5%	63.2%	15.8%	23.1%	46.2%	23.1%	7.7%	7.7%	0.019 *
6 演じることは楽しかった	33.3%	55.6%	11.1%	0.0%	36.8%	52.6%	10.5%	0.0%	15.4%	84.6%	0.0%	0.0%	53.8%	15.4%
7 演じることは楽しかった	11.1%	44.4%	33.3%	11.1%	10.5%	52.6%	36.8%	0.0%	0.0%	69.2%	23.1%	7.7%	46.2%	53.8%
8 演技中に気づいたことを忘れてしまわないか か心配だった	16.7%	66.7%	16.7%	0.0%	31.6%	31.6%	26.3%	10.5%	53.8%	23.1%	23.1%	0.0%	46.2%	30.8%
9 他の模擬患者と理解が異なっていないか 不安だった	27.8%	38.9%	27.8%	5.6%	26.3%	21.1%	42.1%	10.5%	30.8%	23.1%	38.5%	7.7%	46.2%	38.5%
10 演技中に観察学生の存在が気になった	0.0%	22.2%	44.4%	33.3%	5.3%	10.5%	63.2%	21.1%	7.7%	15.4%	46.2%	30.8%	0.0%	7.7%
11 演技中に観察者(教員)の存在が気にな った	0.0%	11.1%	66.7%	22.2%	0.0%	5.3%	68.4%	23.6%	0.0%	23.1%	38.5%	38.5%	0.0%	76.9%
12 演技中に他のSPの様子が気になった	5.6%	33.3%	38.9%	16.7%	5.3%	21.1%	36.8%	36.8%	0.0%	0.0%	61.5%	38.5%	0.0%	7.7%
13 フォードバッグの時間の長さは適切だった	55.6%	38.9%	5.6%	0.0%	21.1%	63.2%	5.3%	0.0%	5.4%	61.5%	23.1%	0.0%	46.2%	53.8%
14 フォードバッグをすることは難しかった	22.2%	44.4%	27.8%	5.6%	10.5%	57.9%	21.1%	5.3%	30.8%	53.8%	15.4%	0.0%	0.0%	69.2%
15 学生4人一組という人数は適切だった	55.6%	44.4%	0.0%	0.0%	47.4%	47.4%	5.3%	0.0%	46.2%	46.2%	0.0%	0.0%	53.8%	46.2%
16 教育に役立つことかと思 う	22.2%	61.1%	16.7%	0.0%	31.6%	68.4%	0.0%	0.0%	30.8%	53.8%	15.4%	0.0%	30.8%	69.2%
17 模擬患者を設定した教育は有効かと思 う	66.7%	33.3%	0.0%	0.0%	78.9%	21.1%	0.0%	0.0%	69.2%	30.8%	0.0%	0.0%	84.6%	15.4%
18 患者の立場を実感できた	83.3%	16.7%	0.0%	0.0%	78.9%	21.1%	0.0%	0.0%	69.2%	30.8%	0.0%	0.0%	53.8%	38.5%
19 日頃の看護を振り返る機会となった	77.8%	22.2%	0.0%	0.0%	84.2%	10.5%	5.3%	0.0%	69.2%	23.1%	7.7%	0.0%	46.2%	46.2%
20 今後もSPとして協力してよい	16.7%	55.6%	22.2%	0.0%	26.3%	63.2%	10.5%	0.0%	15.4%	53.8%	30.8%	0.0%	15.4%	46.2%

*p<0.05 **p<0.01

表3 SP実施後の評価（2005～2008年度） n=63

項目	そう思う	そう思わない
1 患者役は精神的に負担であった	38人 60%	25人 40%
2 患者役は身体的に負担であった	11人 17%	52人 83%
3 設定患者はイメージしやすかった	54人 87%	8人 13%
4 イメージどおりの患者を演じることができた	22人 35%	41人 65%
5 演じることに恥ずかしかった	28人 46%	33人 54%
6 演じることは難しかった	57人 90%	6人 10%
7 演じることは楽しかった	37人 59%	26人 41%
8 演技中に気づいたことを忘れてしまわないか心配だった	47人 75%	16人 25%
9 他の模擬患者と理解が異なっていないか不安だった	36人 57%	27人 43%
10 演技中に観察学生の存在が気になった	11人 17%	52人 83%
11 演技中に観察者(教員)の存在が気になった	6人 10%	57人 90%
12 演技中に他のSPの様子が気になった	13人 21%	49人 79%
13 フィードバックの時間の長さは適切だった	52人 85%	9人 15%
14 フィードバックをすることは難しかった	50人 81%	12人 19%
15 学生4人一組という人数は適切だった	55人 89%	7人 11%
16 教育に役立つことができたと思う	61人 97%	2人 3%
17 模擬患者を設定した教育は有効だと思う	60人 95%	3人 5%
18 患者の立場を実感できた	62人 98%	1人 2%
19 日頃の看護を振り返る機会となった	60人 95%	3人 5%
20 今後もSPとして協力してよい	52人 83%	11人 17%

ることは恥ずかしかった」「フィードバックは難しかった」「SPを用いた教育は有効だ」の3項目であった。他の項目については有意差がなかったため、2005～2008年度の総計した結果からSPを実施してみてどのように感じていたのか、回答肢の「とてもそう思う」「ややそう思う」を「そう思う」に集約し、「あまりそう思わない」「全くそう思わない」を「そう思わない」に集約してSPからの意見の傾向をみた(表3)。

1) 患者役への負担感

負担感では、「患者役は精神的に負担であった」と回答した者が60%であった。一方、「身体的に負担であった」と回答した者は17.5%で、身体的な負担より精神的な負担感を抱いている

ことが明らかになった。

2) 演技について

「演じることは難しかった」と回答した者が90%で、ほとんどが難しさを感じていた。しかし、「演じることは楽しかった」と回答した者も59%あった。また、「演じることは恥ずかしかった」と回答した者は46%であった。年度ごとの比較では、2005年と2007年が「恥ずかしかった」と回答した者が約70%と多かったが、2006年と2008年は約20～30%と少なかった(図4)。

「設定患者はイメージしやすかった」と回答した者は87%、「イメージどおり患者を演じることができた」と回答した者は35%、できなかった者が65%であった。また、「他のSPと理解が異なっていないか不安だ」と回答した者

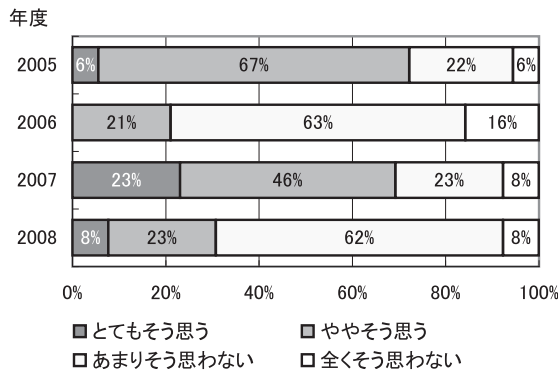


図4 演じることは恥ずかしかった

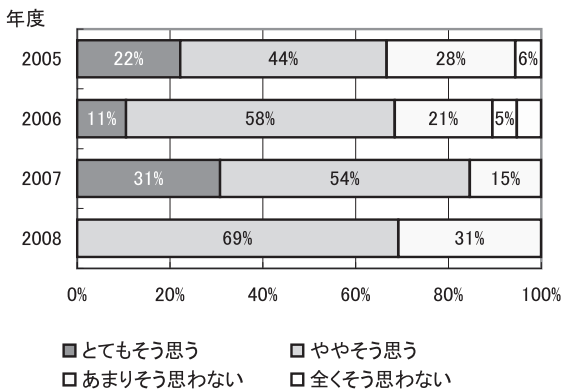


図5 フィードバックをすることは難しかった

が57%で「思わない」を上回っていた。

3) フィードバックについて

「フィードバックの時間の長さは適切だった」と回答した者は85%であった。一方「フィードバックすることは難しかった」と回答した者は81%であった。年度ごとの比較では、「難しかった」と回答した者は、2007年以外は70%弱でほぼ同じであるのに対して、2007年には「難しかった」と回答した者が84%と高くなっていた。2008年度には、「とても難しかった」が0%になった(図5)。「演技中に気づいたことを忘れてしまわないか心配だ」と回答した者が75%と、「そう思わない」の25%を大きく上回り、多くのSPが演技しながら適切なフィードバックを行うために気づきを記憶するという課題に困難さを感じていた。

意見の中には、『「ここはこうだ」という指導的な思いがあり、患者になりきってフィードバックすることが難しかった』という看護師経験をもつことでSPとしての葛藤を感じている意見もあった。

4) SP体験について

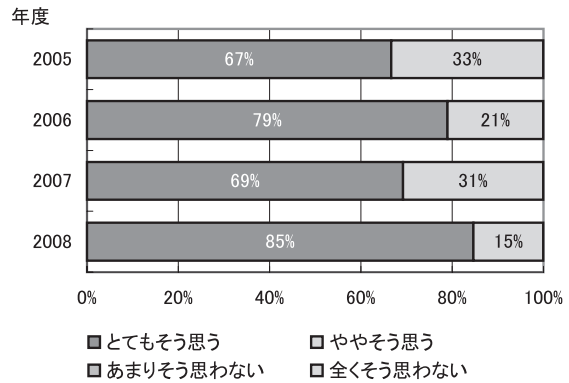


図6 模擬患者を設定した教育は有効だと思う

「模擬患者を設定した教育は有効だと思う」と回答した者は95%であった。年度ごとの比較では、2005年と2007年は「とてもそう思う」が60%台であったが、2006、2008年は80%前後と高かった。「教育に役立つことができた」と回答した者は97%であった(図6)。学生の真剣さ、熱心さを評価していた。

また「患者の立場を実感できた」と回答した者は98%、「日頃の看護をふりかえる機会になった」と回答したものが95%と、SPとしての体験が患者の立場や自分の看護を見直す機会にもなっていた。

VI. 考 察

シミュレーション学習を行う場合大きく2つの活用方法がある。1つは学生の学習評価(試験)として行うことであり、もう1つは、学生の学習機会として行うことである。本プログラムは後者の学習機会に該当する。

事前の研修では、SPの教育効果が高められるように、「SPとは」、「SPの役割」、「SPとしてのフィードバック」の内容等について、研究者自身もMEDC(MEDICAL EDUCATION DEVELOPMENT CENTER, GIFU UNIVERSITY)で開催されたSP養成者のためのワークショップに参加し、研修内容、特にフィードバックの方法を抽象的ではなく具体的に示していった。また、4つのシナリオを連続して実施するため、そのポイントを文字情報だけから漫画を入れて視覚情報として認知しやすくするなどの工夫を行ってきた。

さらに、看護師経験をもつことは学生の技術

などが気になり、助言や指摘をしたくなりやすい。そのためSPの役割とファシリテータの教員の役割を明確化し、「患者の立場」に徹してもらうことを明確に示した。

アンケート結果から、研修時に提供した、役作り支援のシナリオの視覚化、フィードバックのねらいや具体例、学生からのSP参加に関する評価や感想は、役立ったと回答があり、有効であった。しかし、SPの役割にほぼ全員が不安や心配があったと回答し、不安や心配の内容は患者の演技方、フィードバックの仕方であった。実施後の感想でも「演技」「フィードバック」のコア・スキルに対し難しさを感じていた。阿部（2007）が行った調査では、SPの負担感を332名中216名（65%）が負担感が「ある」と回答している。精神的負担感があると回答した割合に近かった。

演技について、「設定患者はイメージしやすかった」、「シナリオの漫画が役だった」など、イメージできても、思いどおりに演技ができた者は35%ほどで、役作りが頭でイメージできても実際に演技すると、人物像がぐらつくなど困難さを感じていた。研修の中で、イメージを膨らませる情報の提供やSP同士の意見交換、見るだけでなく実際にロールプレイをして練習する機会をもつと効果的であると考ええる。

フィードバックについては、約80%のSPが「フィードバックの難しさ」「演技中に気づいたことを記憶しておくことの困難さ」を感じている。フィードバックには注意深い観察や自分自身の心の動きを記憶し述べる必要がある。

また、本プログラムでは学生4人1組で4場面を続けて実施するため、多くの気づきを忘れないで伝えることが求められる。場面毎に休憩兼メモをする時間にあてる工夫をして対処している。今後、SP研修でのビデオ撮影レビューやふりかえり時にSPの記憶の引き出しを促進するためにファシリテータが質問をするなどが有効であると考ええる。

ほとんどのSPがSP参加型看護教育の有効性を感じており、SPとして参加することは教育に貢献できたと認識していた。さらに、患者の立場を実感できる、日頃の看護をふりかえる

ことができたなど、まなごしの転換をはかることで看護師自身の気づきを促し、参加の意義を見いだせていた。

年度毎の比較では、有意差があったのは3項目のみで経年的によくなっていることを明らかにすることはできなかった。また3項目においても経年的に評価が改善しているとは言い切れず、研修での工夫との関係を明らかにすることはできなかった。

これまで、学生による実施後の評価において、SPに実施することが真剣に取り組む動機づけとなり、SPの臨場感、SPへの看護技術の提供、SPからのフィードバックに高い満足感を得ていた（別所，2008）。SPに対する研修は2時間程度と短時間で実施しているが、学生からの評価として、SPの臨場感やSPからのフィードバックが有効であることに高い評価が得られていることはSPの演技やフィードバックが適切に実施されていることの現れでもあると考える。

また、「今後もSPとして協力してよい」と回答した者が83%あったことは、SPとしてこの教育に参加して演技やフィードバックに困難を感じるだけでなく、この教育の意義や演技やフィードバックすることに関心をもってもらえていると考える。

VII. 結 論

看護師経験をもつSP63名を対象に、事前にSP研修を実施した。研修内容は毎年少しずつ変更を加え、特に患者としての役作り支援としてシナリオの視覚化、フィードバックのねらいや具体例、学生からのSP参加に関する評価や感想の伝達などを実施した。

参加したSPからのアンケートで、研修の工夫には高い評価が得られたが、SPのうち約60%は、精神的負担感を感じており、演技とフィードバックの2つのコア・スキルを難しいと感じ、患者としての役作りやフィードバックのための心の動きの記憶や注意深い観察などに困難さが推察できた。今後、これらの問題の解決のために、研修の中で、役作りのためのSP同士の意見交換、見るだけでなく実際にロール

プレイをして練習する機会をもつ、ビデオ撮影レビューやふりかえり時にSPの記憶の引き出しを促進するためにファシリテータが質問をするなどを工夫していくことを検討する必要がある。

臨地実習前教育における看護師経験をもつ模擬患者（SP）導入の意義－SPフィードバック内容の分析から－，島根県立大学短期大学部出雲キャンパス研究紀要，1，59-66.

引用文献

- 阿部恵子, 鈴木富雄, 藤崎和彦, 伴信太郎(2007):
模擬患者（SP）の現況及び満足度と負担感 全国意識調査第1報, 医学教育, 38(5), 301-307.
- 別所史恵, 田原和美, 吉川洋子, 松本亥智江, 松岡文子, 長崎雅子, 井山ゆり (2008):
模擬患者（SP）参加による「看護基本技術支援プログラム」の評価－2007年度実施報告－, 島根県立大学短期大学部出雲キャンパス研究紀要, 2, 61-74.
- 井上千晶, 井山ゆり, 吉川洋子, 長崎雅子, 別所史恵, 秋鹿都子, 松本亥智江, 松岡文子 (2006): 「看護基本技術支援プログラム」が学生の学習課題と自己学習及び臨地実習へ与えた影響, 島根県立看護短期大学紀要, 12, 51-58.
- 岐阜大学医学教育開発研究センター (2009),
新しい医学教育の流れ '09冬第31回医学教育セミナーとワークショップの記録, 7-52.
- 岐阜大学医学教育開発研究センター (2006),
新しい医学教育の流れ '06夏第21回医学教育セミナーとワークショップの記録, 57-77.
- 松本亥智江, 井山ゆり, 吉川洋子, 松岡文子, 長崎雅子, 井上千晶, 秋鹿都子 (2008):
看護実践能力向上に向けた看護基本技術習得上の課題, 島根県立大学短期大学部出雲キャンパス研究紀要, 2, 75-80.
- 吉川洋子, 田原和美, 松本亥智江, 別所史恵, 松岡文子, 秋鹿都子, 井上千晶, 井山ゆり (2008):
模擬患者参加型看護技術教育における学生へのフィードバックの傾向, 第39回日本看護学会論文集看護教育, 190-192.
- 吉川洋子, 松本亥智江, 松岡文子, 長崎雅子, 別所史恵, 秋鹿都子, 井山ゆり, 井上千晶:

Results and Problems of the Simulated Patient Training in the Nursing Education

Yoko YOSHIKAWA, Kazumi TAWARA, Ichie MATSUMOTO
Ayako MATSUOKA*, Chiaki INOUE, Fumie and BESSHO

Key Words and Phrases : Questionnaire, Patient Simulation,
Nursing technical education, Nurse,
Simulated Patient seminar

* Itsukaichi Memorial Hospital